

TZ ほんの窓

第 1 号 (2004.10.1) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏図書助成コーナー「本の紹介」班

前衛表現の日本での展開 : 1920 年代を中心に

(1) 1920 年代の世界の潮流

第 1 次世界大戦下のヨーロッパでは、民衆に厳しい抑圧・犠牲を強いた結果、民衆の国家に対する怨念が蓄積されていった。そのため大戦終結とともに始まる新しい時代は、民衆の解放感と国家に対する不信感を根底としていた。このような不安定な社会情勢を背景に、ダダイズムや未来派、シュールレアリスムなどの芸術革新運動が広範囲にわたって展開した。

『**光芒の 1920 年代**』(朝日新聞社、1983 年)では、都市・映画・演劇・音楽・美術・建築・

光芒の
1920 年代
朝日ジャーナル編

文学・思想・科学・風俗・機械・スポーツなど、実に様々な方面について多数の写真とともに、1920年代がどのような時代であったかをわかりやすく紹介している。雑誌『**思想**』(1981.10-11 No.688-689)では、そのような芸術革命の起こる背景にあった思想を理解する上で手助けとなる特集、『**1920 年代・現代思想の源流**』が組まれており、当時のヨーロッパにおいて人々が世界的指針を求めたために諸種

*Qc**165** のイデオロギーの葛藤が激しかった世相が見えてくる。

日本でもこうした 1920 年代の西欧の前衛芸術運動が、若い学生や知識人をとらえ、文学、美術、演劇、音楽、映画、風俗といったあらゆる芸術のジャンルにおいて、ほとんど同時的反響をよびおこすことになった。

2) 日本における同時的展開

実際に日本では前衛芸術運動はどのように受容・発展したのか、ここでは**五十殿利治氏・海野弘氏**を紹介したい。五十殿利治氏は、激しく変化する思潮のなかで、新しい表現形式を模索した急進的な芸術運動である大正期の美術運動を紹介した『**大正期新興美術運動の研究**』(スカイドア、1998 年)で、各章において外国の美術家や運動との直接的文化交流を紹介し、『**日本のアヴァンギャルド芸術<マヴォ>とその時代**』(青土社、2001 年)では、1910 年代から 30 年代初頭までを対象に、大正新興

大正期
新興美術運動
の研究
五十殿利治

日本のア
ヴァン
ギャル
ド
五十殿
利治

美術の中核をなす**マヴォ**・三科を中心にした美術運動のダイナミズム及びそのダイナミズムがいかに国境を越え「アヴァンギャルド」と接触したかを、既成の美術史の記述からはみ出した断面に着目して捉えようと試みている。両書には新興美術運動の同時代性の実態、動態が立証されている。また 1930 年代に存在する 1920 年代のモダニズムへの批判という視座に注目した『**モダニズム/ナシヨナリズム**』(せりか書房、2003 年)では、芸術の最前線を見極めようと創造

的な批判の方法を探求する時代が示され、1920 年代を逆照射する事ができる。一方、海野弘氏の『**モダン都市東京：日本の 1920 年代**』(中央公論社、1983 年)では、同時代に流れ込んできた欧米の都市文学により生み出された新しい「都市表現」の実験の諸相を、都市と文学という観点から読み解いている。

モダニズム/ナ
シヨナリズム
五十殿利治
+ 水沢勉編

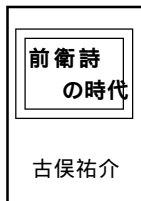
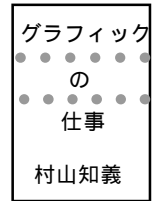
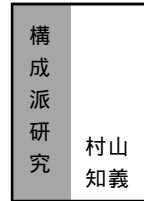
モ
ダン
都市
東京
海
野
弘

*7000**574**

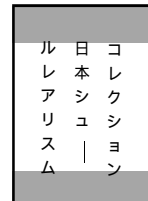
*Pb**B746**

③ 各ジャンルにおける作品と人物

村山知義は、絵画・グラフィック・小説・建築・翻訳・脚本・舞台装置と幅広く活躍し、展覧会を催し、絵画、彫刻に止まらず舞台美術、音楽、詩の発表において斬新な創造活動を行う同人組織「マヴォ」の中心人物であった。ダダの「否定の表現」をさらに否定して建設の方向へ、どう統合し組織するかを模索し、意識的構成主義を唱えた。彼の『構成派研究』*（本の泉社、2002年）『グラフィックの仕事』*（本の泉社、2001年）では、工業・機械・科学などにインスパイアされ、工業的過程において用いられる方法を借り材料を利用することによって、自然とのつながりを断ち切られて浮遊するイメージやフォルムを、現代都市の環境の中から引き出していく新しい方法論と実践を目にすることができる。 *『構成派研究』(中央美術社、1926年)の復刻版

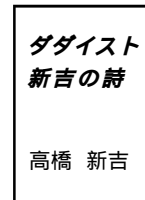
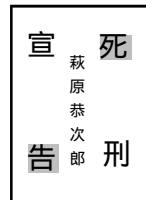


『前衛詩の時代』(古俣祐介著、創成社、1999年)では前史としての未来派、その導入と発展、ダダの展開、ダダの行方とその後の影響など、1920年代を中心とした前衛詩の誕生から終焉までの流れを、世界の潮流との並立を意識してわかりやすくまとめている。シュールレアリスムの詩、美術、批評等の作品を集めた『コレクション・日本シュールレアリスム』(本の友社、全15巻)は、当時の日本のシュールレアリスムの成果を概観できる復刻全集であり、様々な作者たちをつき動かしていた表現意欲を再現している。 *9100**1516**



*7000**571**1-15

ダダイズムを代表する2人の詩人を紹介する。萩原恭次郎の詩集『死刑宣告』*(日本図書センター、2004年)では、活字の大小や書体の使い分け、縦組みと横組みの混在、天地反転組みなど、視覚的に読者を驚かせるしくみをご覧いただきたい。高橋新吉の『ダダイスト新吉の詩』(日本図書センター、2003年)でも視覚的攪乱効果を狙った技法を用い、特徴ある単語を執拗に繰り返し、途中で意味に係わりなく流れを切断するなどの独特な「乱調」や「認識の錯乱」による詩を提示している。



*9100**1515**

*『死刑宣告』(長隆舎書店、1925年)の復刻本

*9100**1514**



最後に紹介する『「新青年」の共和国』(大石雅彦、水声社、1992年)は、1920年に創刊され第2次世界大戦後の廃刊まで続いた雑誌「新青年」について考察している。「新青年」は単なる探偵小説雑誌という枠を越えて、表現ジャンルの多様さ、文学のジャンルの中での多様さ、そして文体の多様さが結果としてカラーズの多様性を形造っていて、メディアとしての雑誌のスタイルの実験、さらには作品の表現のスタイルの実験の結果であった点において、非常に特異な存在であった。 *9100**1513**